

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究（3）-他者-」2013年度第1回（通算第6回）研究会

日時：2013年4月28日（日曜日）午後1時～7時

場所：マルティメディアセミナー室（306室）

報告者：

1. 中村美知夫（AA研共同研究員・京都大学）
2. 大村敬一（AA研共同研究員・大阪大学）

内容

1. 動物の他者論（中村美知夫）

一般的な感覚で言えば、「他者」というのは自己に対する他者である。哲学や人類学などで他者が問題にされる際には、まずこれら双方（自己と他者）がヒトという種であることが暗黙のうちに想定されていることが多い。だが、「人類社会の進化的基盤研究」という立場から他者を問題にするならば、そもそもヒト以外の動物が他者でありうるのか、動物にとっても他者は存在しうるのかという点をまずは検討せねばならない。本発表では、他者＝ヒトという前提をまずは排除した上で、どのように動物の他者論を展開しうるかを考察した。

「他者」という語には、二つの相反する含みがある。日常的感覚として「私」と似ている一ゆえに分かり合える一という含みと、厳密には「私」とは違う一ゆえに分かり合えない一という含みである。それ以外にも、異なる研究分野によって、「他者」が示す範囲や対象が異なっていることは、共通の議論をしていく際に大きな問題となる。そこで、まず本発表では、誰にとっての他者かという視点から、人間⇔動物、個⇔集団という二つの直行する座標軸を考え、そうしたさまざまな研究分野での「他者」概念がそのどこに位置づけられるのかを概観した。

次に、人間にとっての他者と動物にとっての他者の二つを対比させて、「〇〇を持っている」（〇〇には主体性／心／魂／理性／認知能力などが入る）、「××ではない」（××には、たとえば日本人／村人などが入る）、「社会的にインタラクション可能」という三つの基準によって「他者」を捉え直すことを試みた。その上で、暫定的に第三の基準に従って、「動物にとっての他者とは、その動物と実際に社会的にインタラクトするかもしくはそうすることが可能であると思える相手である」と考え、野生チンパンジーの、同種個体（同集団／他集団／想像上の個体）や他種の動物（アカコロボス／イボイノシシ／ヒトなど）が他者と言えるのかどうかを、境界的と思われる事例を紹介しながら検討した。

以上のように、本発表では、人間や、人間的な心を前提とせず、なるべく広く「他者」

を捉えるという立場を取った。他者とは社会的な相手であるという立場に立てば、他者はさまざまな動物種に広く認められることになる（少なくとも観察者がそのように捉えることは可能である）し、種内に限定される必要もない。

動物は、同種・他種の動物とさまざまな形でインタラクトする。しかし、そうしたインタラクションのどこまでを「社会的」と呼びうるのかは、簡単には決められない。さらには、「社会的」という際の中身は分類群によっても異なりうるだろう。こうした点については今後さらなる検討が必要である。

また、動物にとっての他者を問題とする場合、観察者問題が生ずることも忘れてはならない。すなわち、観察者自身と対象とが似ていると「他者」を読み込みやすいとか、観察者側の表象能力や想像力によって観察者が勝手に対象動物に「他者」を読み込んでいった可能性は常につきまとう。

最後に、「他者」は進化するか、という問題についても考察をおこなった。社会的にインタラクトできるもしくはインタラクトできる可能性を持った相手が他者であるとするれば、他者の進化を問うことは、社会的インタラクションの進化を問うことである。社会的インタラクションは、遺伝的な基盤をベースとしながらも、遺伝子とは別のルートで社会的に継承されるシステムの一つである。進化を継承されるシステムの時間的な変化と捉えるならば、当然社会的インタラクションは進化する。そしてそこに現われる「他者」もまた進化しうると言えるだろう。

2. 集団を生成して維持する想像力：イヌイトの拡大家族集団にみる「子どもの他者化」と「野生動物の異者化」（大村敬一）

この発表では、関係が想像される際の視点の違いに着目して関係のあり方を（1）「システム／環境」関係、（2）閉じた自異関係（関係内部に閉じた「自己／異者たち」関係）、（3）自他関係（「自己／他者」関係）、（4）開いた自異関係（関係の外を巻き込んだ「自己／異者たち」関係と「自己たち／異者たち」関係）の4つに類型化し、その類型に基づいてイヌイトの拡大家族集団が生成されて維持されるメカニズムを分析することで、想像力を介した社会関係の組織化が人類の社会集団の生成と維持にあたって重要な役割を果たしていることを指摘した。

I 関係の類型論

（1）「システム／環境」関係

絶え間なく自己生成するシステム（原理的には細胞でも神経組織でも何でもよいが、ここでは生物個体を想定している）が絶え間なく自己生成することで生じ、維持されるシステ

ムとその環境の関係。この関係では、システムの「内（システム）／外（環境）」の区別が生成されるが、その「内／外」の区別が「自己／異者」として意識されて客体化されることはない。つまり、「外（環境）」は「システム／環境」の界面での相互作用を通して知られるだけで、その外延は外に向かって無限に発散し、まとまりをもつ対象として客体化されることはない。また、「システム／環境」関係全体の外側が想像されることも、その外側から「システム／環境」関係の全体を客体化する視点が想像されることもない。そのため、この関係では、システムが自らを自己として意識することも、「システム／環境」関係の二つの項（「システム」と「環境」）が相対化されることも、この二つの項が互換的になることもない。

（2）閉じた自異関係（関係内部に閉じた「自己／異者たち」関係）

「システム／環境」関係の区別が意識され、システムがシステム自身を「自己」として意識し、その環境を「異者たち」の集合として客体化するが、その「自己／異者たち」関係全体の外側を想像することも、その外側として想像された視点から関係全体を客体化することもなく、「自己／異者たち」関係に埋め込まれた「自己」の視点のみに基づいて「異者たち」と相互作用を交わす関係。ここでは、現実の相互作用のなかにある「自己の視点」だけがあり、その「自己の視点」が相対化されることはない。この意味で、この関係は自己中心的な関係であり、そこでは、「自己」に対する配慮はあっても、「他者たち」に対する配慮はなく、「自己」は行為の主体となっても「他者たち」は行為の主体にならず、ただ反応を返してくる客体にすぎない。

（3）自他関係（「自己／他者」関係）

「自己／異者たち」関係にある「自己」が想像力によって「異者たち」に「自己」を投影することで、「自己」も「異者たち」もともに相互行為の主体となることで生じる。この関係では、二つの主体のどちらもが、想像された相手（他者）の視点から相互に自己を客体化しつつ相対化しながら相手（他者）と相互行為を交わし合う。そこでは、二つの主体のどちらもが、（1）現実の自己と（2）その自己を客体化する相手（他者）の視点として想像された自己（想像された自己としての他者）に二重化され、「現実の自己としての自己」の視点と「想像の自己としての他者」の視点の間を行き来することを前提に相互行為する。つまり、「現実の自己の視点」に加えて、その自己を客体化する「他者としての自己の視点」が想像され、二つの主体のどちらもが「現実の自己としての自己の視点」と「想像の自己としての他者の視点」という二重の視点に立つという前提のもとで、自己と他者が相対化されて互換的な項に変換される。この関係は、「私は他者になり変わり、その際に他者も私になり変わる人物として理解されるが、この事実を私も他者も了解している」ことを前提に相互行為が展開される事態としてアルフレッド・シュッツが定義したコミュニケーションでの関係に相当し、主体と主体を対等につなげる社会性の基礎となる。ここでは自己と他者は相互に互換的で対等な項として想像され、その想像された前提に基づいて相互行為が展開されるため、結果として対等な関係が生成する。この関係は誰に対しても何に対し

でも事実上無限に拡張してゆくことができるため、人類個体を同種他個体やそれ以外のものと結びつける接着剤として社会性の基礎となるが、その無限の拡張性のため、一つのまとまった集団に収束することはない。

(4) 開いた自異関係（関係の外を巻き込んだ「自己／異者たち」関係と「自己たち／異者たち」関係）

自他関係にある複数の主体のうちの一つの主体が、その自他関係の網の目から切り離された者として想像され、その想像に基づいて、それ以外の主体と一方的な行為を非対称に交わす関係。この関係には、(1) 切り離された主体が自己で、それ以外の主体たちが異者となる場合、(2) 切り離された主体が異者で、それ以外の主体たちが自己たち（われわれ）となる場合の二種類がある。前者の場合、自他関係の網の目から切り離された立場として想像された主体が、残りの主体たちと相互行為を交わすことなく、その異者たちとしての主体たちを一方的に観察するという想像の場をもたらし、社会科学の基礎となる関係を生成する。他方で後者の場合、自他関係を交わし合う自己たちが、自他関係の網の目から切り離された異者と相互行為を交わすことなく、その異者に一方的な行為で働きかけるという想像の場が生成される。この後者の場が想像され、その想像に基づいて行為が生成されるとき、一つの異者に対して一方的な行為で働きかける自己たち（われわれ）が生成され、無限に拡張する自他関係が、一つの異者に対して一方的で非対称な行為で働きかけるという共通項をもつ集団として分節される。その結果として、主体を結びつける接着剤として社会性の基本ではあるが、無限に接続可能で拡散してしまうためにまとまりのない自他関係のネットワークから、異者に対する一方的で非対称な関係を軸に生成する集団のまとまりが切り取られ、「われわれ」という集団が生成する。

II イヌイトの拡大家族集団の生成と維持のメカニズム

この4類型の関係のあり方に基づいて分析を行うと、カナダ極北圏の先住民であるイヌイトの拡大家族集団が生成されて維持されるメカニズムを次のように整理することができる。

(1) 野生生物の異者化：集団外部との関係の制御による拡大家族集団の生成と維持

拡大家族集団の外部における狩猟の場で「自他関係」に基づいてイヌイト個人（ハンター）が相互行為を交わす「他者」としての野生生物個体が、屠殺を通して「異者」としての「肉（食べもの）」に変換され、その「異者」としての肉が拡大家族集団の内部に持ち込まれて分かち合われることで、「われわれ」としての拡大家族集団が生成されて維持されると同時に、その「われわれ」（自集団）と互恵的な関係にある野生生物種が他集団として生成されて維持される。ここでは、イヌイト個人（ハンター）との「自他関係」にある野生生物個体が、屠殺と拡大家族集団内部への取り込みによって、イヌイト個人（ハンター）という「自己」と対等で互換的な関係にある「他者」としての地位を奪われると同時に、拡大家族集団の内部でその成員から一方的に共有される（食べられる）「肉（食べもの）」という「異者」に変換される。そのうえで、その「異者」という「肉（食べもの）」に対して拡大

家族集団の成員が「開いた自異関係」（関係の外を巻き込んだ「自己たち／異者たち」関係）に基づく「分かち合い」という非対称で一方的な相互行為を行うことで、それ以前からあるイヌイト同士の「自他関係」のネットワークを維持したまま、拡大家族集団というまとまりが切り出される。また、この「他者」から「異者」への変換によって生成された拡大家族集団というまとまりに基づいて、そのまとまりという個体間関係よりも一つ上の次元にある集団のレベルが想像されるようになり、「異者」としての「肉（食べもの）」に変換された野生生物個体が属するはずの野生生物種が、「自集団」と互恵的な関係を結ぶ「他集団」として想像されるようになる。こうして、「拡大家族集団というイヌイトの社会集団」と「拡大家族集団と互恵的な関係を結ぶ野生生物種」という二つの集団が生成されて維持される。

（２）子どもの他者化：集団内部の関係の制御による拡大家族集団の生成と維持（リクルートの過程）

拡大家族集団に一つの「システム」（個体）として生まれ、拡大家族集団の大人たちと「システム／環境」関係を交わすことから始める「幼児」に対して、大人たちが「開かれた自異関係」（関係の外を巻き込んだ「自己たち／異者たち」関係）に基づく非対称で一方的な行為（一方的に愛情を注ぐ）で働きかけることで、「システム／環境」関係の「システム」として自己意識をもたない「幼児」は、（１）「閉じた自異関係」での自己中心的な「自己」としての「子ども」を経て、（２）対等な「自他関係」での「他者」としての「大人」に変換されてゆく。この変換の第一段階では、「幼児」を「一方的に甘やかす」という方法、第二段階では、「子ども」を「一方的にからかう」（イヌイト社会においては、「甘やかす」と並ぶもう一つの愛情の注ぎ方）という方法が採られる。このとき、「大人」たちの視点からは「幼児」も「子ども」も「開いた自異関係」における「異者」だが、「大人」たちは「幼児」にとって「環境」、「子ども」にとっては「閉じた自異関係」における「異者たち」となる。この過程では、（１）生物個体という「システム」としての幼児から、大人たちと対等で双方向的な「自他関係」を交わし合う「他者」としての自律した「大人」が生産され、拡大家族集団の成員が補充されリクルートされるだけでなく、（２）対等に双方向的な「自他関係」を交わす自律した「大人たち」が、「開かれた自異関係」（関係の外を巻き込んだ「自己たち／異者たち」関係）に基づく一方的で非対称な行為（一方的に愛情を注ぐ）で「幼児」と「子ども」に働きかけることで、対等で自律した「大人」たちの集団である拡大家族集団が生成される。つまり、拡大家族集団の生成と維持がその成員のリクルートと同時にされる。

Ⅲ 集団を生成して維持する能力：想像力による関係の変換と組織化

こうした集団の外部と内部の関係の操作と制御によるイヌイトの拡大家族集団の生成と維持のメカニズムから次の二つのことがわかる。

(1) 想像力による関係の変換を通じた個体の変換（「システムとしての幼児」から「異者としての子ども」を経て「他者としての大人」へ；「他者としての個体」から「異者としての肉」へ）を媒介に、(1) 自律したイヌイトの「大人」同士の対等な「自他関係」という個体レベルの自他関係、(2) 自集団（イヌイトの拡大家族集団）と他集団（野生生物種）という集団レベルの自他関係、という二つのレベルの自他関係が生成される。

(2) 想像力による関係の変換によって、対等な「自他関係」にある自律した他者たちを一方的かつ非対称にひきつけるブラックホールとしての「異者」（「異者としての肉」と「異者としての子ども」）を生成し、そのブラックホールに対して一方的で非対称な行為で共通に働きかけることで、自律した「他者」たちの対等な「自他関係」を温存しつつ、一つの社会集団にまとめ上げることができる。

このことから人類の社会集団の生成と維持に関して次の仮説を導き出すことができる。

(1) 人類の社会集団が生成されて維持される際には、社会集団の再生産に必須の資源を (i) 外部から取り込む過程と (ii) 内部から生み出す過程を想像力によって制御すること（変換と組織化）が要になっている。

(i) 外部から取り込む過程：集団内の個体の生存に必要な資源を外部から取り込む生業システム（「他者」としての野生生物個体を「肉」という「食べもの」という「異者」に変換して取り込む）。

(ii) 内部から生み出す過程：集団の再生産に必要な自律した他者の集団内で生成する生殖と養育のシステム（「システム」としての「幼児」を「異者」としての「子ども」を経て「他者」としての「大人」に変換してリクルート）

(2) 人類の社会集団の生成と維持にあっては、自律した「他者」同士の対等な「自他関係」を基礎に、それぞれの他者の自律性と対等な自他関係を維持したまま、社会集団というまとまりを生成して維持するための方法、つまり「自律」と「連帯」を両立させるための方法が解決されるべきもっとも重要な問題となる、

この仮説が人類社会の進化史的基盤としてどこまで妥当なのか、検討してゆくことが今後の課題である。